

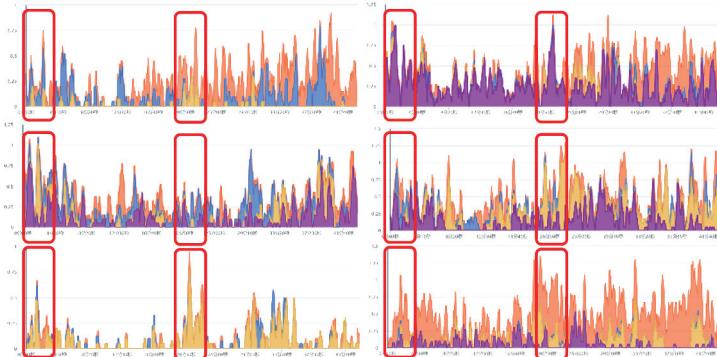
匠の技の可視化実証事業（話し合いの可視化）



「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、コミュニケーション能力の重要性が高まる中、音声は一瞬で消えてしまうためデータの定量化が難しく、行動改善につなげにくいことが課題となっている。

そこで、匠の技の可視化実証事業において、ハイラブル社のたまご型レコーダーを使用し、客観的なデータを基に話し合いを可視化し、教師のどのような声かけや発問が児童生徒の学びに影響を与えているのかについて検証し、質の高い学びの実現に向けて取り組んできた。

【検証1】児童生徒の学習時の発話量の時間変化より



上グラフによると、教師の精選した意図的な発問によって、話し合い活動において児童生徒の発話量が増える傾向が見られた。特に、以下のような発問の際に高い数値となった。

*〇〇さんは、なぜたし算をしたのかな（つなげる）

*〇〇さんは、何に着目したのかな（深める）

※R 3 指導の重点・主な施策 p 4 ③発問による授業づくり参照

また、教科の特質に応じた見方・考え方を児童生徒が働きかけている様子も見られた。発話量からも主体的に話し合いが行われている結果が見られた。

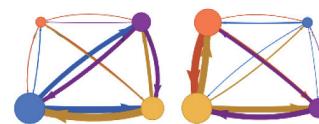
【検証2】話し合いデータを児童生徒が活用した取組より

児童生徒が自分たちの話し合いをデータに基づき客観的に把握する時間を授業内で意図的に設定し、教師による中間指導も含め、グループ内の関わり合いや発話量について確認をするようにした。

そうすることでその後の話し合いの見通しがもてるようになり、多くのグループで前半の話し合いより主体的に関わろうとする様子が見られ、行動の傾向分析からもその変化を見ることができた。



【検証3】発話の関わり合い（ターンテイクより）



多くの授業において、話し合いのグループが4~5人で編成されていたが、ターンテイクを見てみると、グループの多くで、上データのように主体的に話し合いに参加できないメンバーが必ず1名以上存在することが分かった。3人グループの際には、比較的関わり合いのバランスがよく、個人的な発話量、重なり度、盛り上げ度についても伸びが見られる結果となった。

メディアリテラシー教育 効果測定プロジェクト



インターネット、スマートフォン、SNSの急速な普及とともに、GIGAスクール構想による1人1台端末の活用も進む中、メディアリテラシー教育の必要性が増している。一方、メディアリテラシー教育の効果について、その測定・検証が十分になされているとは言い難い。

そこで、スマートニュース メディア研究所と、以下のとおり共同研究に取り組み、東京学芸大学、弘前大学及び京都大学所属の教授陣の協力を得てプロジェクトを進めている。

なお、効果測定は現在進行中であり、分析結果は改めて報告する。

◆プロジェクト概要

市内小学校（一校）の5年生に対して、メディアリテラシー教育のエッセンスを盛り込んだ授業（教科授業5回、特別授業2回）を実施。プロジェクト前後で効果測定調査を実施し、埼玉県学力・学習状況調査結果、抽出児童へのインタビュー、ハイラブル社のたまご型レコーダーの収集データ等を基に、変容を分析する。なお、効果を検証するため、処理群と対照群の学級を設定した。

◆効果測定調査問題

効果測定問題は、京都大学・楠見孝教授、弘前大学・森本洋介准教授の協力のもと、スマートニュース メディア研究所が作成した。戸田市教育センター研究員からも、調査問題案を64件提供した。

◆授業

弘前大学・森本洋介准教授、東京学芸大学・中村純子准教授が作成した教科授業（国語・社会・算数・理科・道徳）案に基づき、教師と森本准教授が実施。教師は、授業前に、スマートニュース メディア研究所及び協力教授陣より研修を受講した。

この画像は、動画サイトに掲載されているサムネイルです。この画像を見て、動画の内容として正しいものを選んでください。



- ①このV Tuberは女性である。
- ②おすすめの商品が10個紹介されている。
- ③投稿者は紹介した商品を購入した。
- ④どれも正しくない可能性がある。

教育センター研究員が作成した問題案の一部

※効果測定による分析結果等は、令和5年5月を目途にスマートニュース メディア研究所より公表予定。